

普段とは違う景色を見ながら沖端を巡る人力車



思い出を運ぶ人力車運行開始 人力車オープニングセレモニー開催

2月25日、沖端町で人力車の運行が始まりました。24日に開催されたオープニングセレモニーでは、式典のあと体験乗車会を実施。関係者が体験乗車を楽しみました。乗車した関係者は「川下りとは違った景色が見れた。柳川の新しい観光資源になるのでは」と期待していました。人力車は白秋生家や御花を巡るショートコースなど3つのコースを設定。営業時間は午前10時～午後6時(月曜定休)。問い合わせは車華力(☎080・4271・9933)

寄付金と理科教材を橋本教育長に贈った緒方理事長(左)



理科教育への興味を高めて 緒方記念財団が小中学校へ理科教材寄付

2月14日、緒方記念科学振興財団が市内19小学校に約120万円の理科教材を、6中学校に寄付金60万円を贈りました。平成8年から中学校、19年からは小学校へも寄付を続ける同財団。緒方祐介理事長は、「子どもたちの笑顔が大好きでその思いを持って寄付を続けている。教科書で見ると実験器具に触れ、理科に興味を持ってもらいたい」と毎年続ける寄付に込めた思いを話しました。橋本教育長は「子どもたちの科学的な考え方を伸ばしたい」とお礼を述べました。

モルックで木製のピンを投げる女の子



競い合うより楽しむを大切に 幅広い年齢層がニュースポーツで交流

大和B&G海洋センターで2月11日、ニュースポーツフェスタが開催されました。コロナ禍を経て接触や発声が少ないものに種目を変更した同イベント。2年前からは木製のピンを倒して点数を競うモルック、カーリングをモデルにしたアタック・ファイブなど全4種目が体験できるようになりました。当日は子どもから高齢者まで幅広い人が来場。家族で訪れた女の子は「初めて体験するスポーツばかりで楽しかった。また家族でやってみよう」と笑顔で答えてくれました。

活動の成果を報告する参加者たち



市民と市が協働で課題解決を目指す 市民協働事業の公開プレゼンを実施

市民と市が協働して地域課題の解決を目指す「市民協働のまちづくり事業」。その公開プレゼンテーションと報告会が2月23日、水の郷で開かれました。当日は3団体が新規事業を発表、6団体が継続事業の成果などを報告しました。カラスによる被害を減らすプロジェクトの成果報告をした伝習館高校2年の桑原佳乃子さんは「私たちだけが取り組んでも効果は薄い。市民に活動を周知し、一緒に取り組んでもらえるようにしたい」と今後の抱負を語りました。



身近な話題などお知らせください。情報をお待ちしています。
【問】企画課広報広聴係(☎77・8425)

市内15の小学校の児童たちが被災地へ向けて募金活動を実施。合わせて38万3635円が集まった



能登半島の復興を願って 市内15の小学校が被災地のために募金

1月1日に発生した能登半島地震。被災地へ義援金を送ろうと、市内15の小学校の児童たちが独自に募金活動に取り組みました。児童の募金活動によって

15校合わせて38万3635円ものお金が集まりました。2月19日と3月7日には、募金に取り組んだ小学校の代表児童が市役所を訪問。「1人でも多くの人々が助かってほしい」「被災者が早く元の生活に戻れるようになってほしい」など、被災地復興への思いを語りながら、集めたお金を金子市長に手渡しました。

田中吉政の子孫で顕彰会副会長を務める田中義照さん(左)



田中吉政の功績を子どもたちに 新たなエピソードを追加した改訂版を寄贈

江戸時代に筑後国主として掘割を整備するなど、柳川の礎を築いた田中吉政の活躍を記した「筑後国主田中吉政・忠政とその時代」。その改訂版115冊が、田中吉政公顕彰会から市内の小中学校や図書館へ寄贈されました。今回の改訂では、吉政が優秀な大工を大川市に迎えたことで、大川市の家具産業発展につながったエピソードなど37ページを加筆。同会副会長の田中義照さんは、2月15日に市役所を訪れ「子どもたちが地元に誇りを持つきっかけになってほしい」と思いを話しました。

掘割に下りて草を刈る参加者たち



2000人が一斉に掘割大掃除 城堀の水落期間中に掘割と周辺を清掃

市民グループ「道守柳川ネットワーク」と市は2月25日、水落ち期間中の城堀周辺で、「堀と道」クリーンアップ大作戦を実施しました。4年ぶりにコロナ禍前の規模で実施した今回は、柳河や城内、沖端地区の住民、婦人会、商工団体、柳川高校など約2000人が参加。あめんぼセンター周辺や沖端地区を中心に掘割に入って草を刈ったり、歩道のごみを拾ったりしました。参加した柳川高校2年の甲斐田朋毅さんは「生まれ育った柳川の美化に貢献できて誇らしい」と話してくれました。